

2007年の主要水産物の需要と供給

単位：数量，1000トン、価格，円/kg

年	数量						価格					
	生産	陸上加工	輸入	輸出	東京	在庫	生産額 (億円)	輸入 (億円)	輸出 (億円)	東京	魚介類消費 支出1世帯	為替 レート
18	5669	2000	3153	594.1	632	1239	16068	17067	2044	854	91,943	116.3
19			2890	612.5	622	1202		16332	2382	857	91,763	117.7
%	0	0	92	103	98	97	0	96	117	100	100	101

数量

本年の国内生産量はほぼ前年並みであった。

全体的な特徴としては冷凍のマグロ類（メバチ、キハダ）の減少が目立ち、前年悪かったスルメイカの増加が顕著であった。

大きく増加した魚種は、ビンナガ（生、冷）、ウルメイワシ、サンマ、ホッケ、スルメイカ等であり、大きく減少した魚種は冷クロマグロ、冷キハダ、サバ類、生鮮メバチ・キハダ等であった。

輸入は、289万トンと引続き為替円安、各国との競合・買い負け等もあって前年をやや下回った。

本年は、目立って多くなったのはシシャモや赤魚、イカ、フィレーで加工度の高いものについてはまだ増勢基調にあったが、概ね減少基調の魚類が多かった。

輸出は、約61.3万トンで前年（59.4万トン）を引続き上回り増加基調を保っている。

目立って多くなったのは海外での旺盛な缶詰需要のためのビン長、国内生産が安定しているサンマやホタテ、イカ類等であった。

東京の入荷量は、62.2万トンで前年（63.2万トン）をやや下回った。市場外流通の影響が若干出ているものと推測される。

在庫量は、月平均120万トンでほぼ前年（124万トン）並みであった。これは、国内生産の停滞や輸入量の減少、輸出の増加等が反映したものと推察される。

価格・金額

本年の産地価格の特徴は、漁が好調であったビン長を除いたマグロ類や海外相場の高騰を反映した冷カツオ、漁獲が減少し且つサイズが大きかったサバ類が前年を上回った。本年も総じて大きく下がった魚種はホッケとスルメイカ位で少なかった。

東京消費地価格は、857円でほぼ前年（854円）並みであった。

輸入金額は、1兆6332億円（前年：1兆7067億円）で前年を735億円下回った。

輸出金額は、2382億円で前年（2044億円）を338億円上回り、今年も順調に量、金額をのばした。

円レート

19年の円レート（対USドル）は、年平均118円で前年（116円）より2円の円安となった。

円レートは、85年の9月のプラザ合意以降一時的な円安がみられたものの急速な円高・ドル安傾向が10年間続いた。

しかし、95年秋から円安に転じ、97年以降に証券会社、銀行の倒産が続き金融システム不安

等も重なり一層円安が進行し、98年も一時140円台の安値を記録するなど秋口まで円安が進行した。その後、一時年末にかけて円高(113円)へと反騰したが、99年は夏場までやや円安(114～121円)で推移したが、下半期には急激に円高に反騰し、12月は103円まで急騰した。2000年は年末の円高の103円からスタートで、一時的な円高はあったが、基本的には円安傾向で推移し、年末には111円まで下げた。01年は長引く不況や銀行、ゼネコン、流通分野での倒産、再編もあり、年を跨いで急激な円安が進行し、9、10月に119円とやや円高に戻したものの12月には124円と円安に急落した。02年には131円の円安から始まってその後円高に転じ、8月に118円まで上昇したが、一向に景況感の低迷もあり12月には122円まで下げた。その結果、為替は10年前の水準まで戻した。03年は年初の119円から始まり9月までは2円前後の幅での小さな動きであったが、10月に111円と急騰し、11、12月と小幅円高で推移し108円まで上げた。04年は年初106円の円高で始まり、5月に112円の円安に振れたが、その後は円高に転じ11月以降は104円、103円まで上げた。05年は年初の103円から下半期には円安に変わり7月には110円まで下げ、その後一貫して円安で推移し、12月には119円まで下げ、年末には若干円高となり117円台で推移した。06年、年初は引続き円高の116円でその後も117円とやや円安で推移していたが、5月に112円と円高に振れたが、それ以降は11月の119円までじり安推移し、11、12月と若干の円高に戻した。07年は年末以上に円安の121円に始まり、6月には123円まで円安が進行した。しかし米国のサブプライムローン等の影響もあって、7月以降は円高に振れ、11月には110円まで進み、12月には112円にやや円安となったが、基本的には下半期は円高基調になった。

(参考：84年237円→85年240円→86年170円→87年146円→88年128円→89年137円→90年145円→91年135円→92年127円→93年112円→94年102円→95年94円→96年108円→97年121円→98年131円→99年114円→2000年107円→2001年121円→2002年126円→2003年116円→2004年108円→2005年110円) 2006年→116円、2007年→118円)

石 油 価 格 (1kl当たり)

19年のA重油価格は、年初は前年来のからの高値を受けて57,000円から始まり2月上旬に56,000円、2月下旬53,000円と下げた。しかし4月下旬54,000円、5月中旬に56,000-57,000円、6月下旬に58,000円、7月上旬59,000円に上げた。その後は小康状態を保ったが、10月上旬60,000円と上げ基調になり、下旬60,500円となり、11月上旬に65,000円と急騰し、中旬69,000円、12月上旬70,000円から75,000円まで上げ、年末まで続いた。この燃油高騰は、世界各国にも及んでおり、国内、国外において操業中止や操業変更等各種漁業にも壊滅的とも思われる深刻な影響を与えた。

参考：近年の最高値74,000円/kl (1982年11月)